

# 高山寺経蔵に伝存する

## 鎌倉時代書写の表白文の文体について

山 本 真 吾

### 一、緒 言

法会の折に宣読される表白文の製作は、平安時代も夙い頃には博士の人々によって行われることが多かったようであるが、後半期に入ると僧侶が自ら筆を執ることが次第に多くなった。<sup>(1)</sup> 小論の筆者はかつてより、この平安時代の表白文を対象としてその文体の史的変遷の跡を記述すべく努めてきた。<sup>(2)</sup>

さて、次代の鎌倉時代に入ると、僧家による表白の作文は弥々活発になり、古社寺・文庫等の写本目録に拠って知り得る文献に限定しても、平安時代とは比較にならない程、増加するのである。

当面は、此等の文献を隈無く調査し、さらに、未だ知られていない、古経蔵などに眠っている文献をも発掘するように努めることが必要となる。そして、表白文体史の課題としては、個々の表白文の有する資料性を考慮に入れながら、これらの諸篇の文体的特徴を明らかにし、その歴史の中に定位させなければならぬであろう。

現段階では、鎌倉時代の表白文の発掘そのものが未だ充分とは言えない状態であるので、かかる課題の解明は、今後に俟つ所が大きいと思われる。

しかし、此度、幸いに、高山寺経蔵に収蔵せられた表白文の代表

的な諸篇について、これを表見し、調査させて頂く機会が与えられた。<sup>(3)</sup> 又、近年、この表白・願文の類の好資料が影印・翻刻されたこともあり、<sup>(4)</sup> 右の課題について、一つの見通しを得ることが出来た。本稿では、これを纏めてみることにしたい。

### 二、高山寺経蔵に於ける表白文の伝存状況

高山寺経蔵には、多数の聖教・漢籍類と共に、数十点上る表白文が、卷子本・冊子本・折紙など諸種の形態で収蔵されている。前稿で対象とした「高山寺本表白集」も、その中の一点である。

今、「高山寺経蔵典籍文書目録」によって、鎌倉時代を中心として、その上接の平安時代、下接の室町時代の書写に係る表白文を拾ってみると次の如くなる。

#### 〔平安時代後期〕

1、(護摩表白) ⑤ (第四部一第二八函一2号) 一帖

○平安時代天喜六年写、綴葉装柀型、「高山寺」朱印、押界、墨点(仮名、平安後期)

#### 〔院政期〕

2、法花経表白⑤ (四一八七—71) 一帖

○平安時代仁安三年写、範臬筆、粘葉装柀型、「高山寺」朱印、

押界、無点

〔鎌倉時代初期〕

3、護摩表白初行 (四一七二—4 (6)) 一通

○鎌倉初期写、折紙、墨点(仮名、鎌倉初期)

4、初夜表白<sup>⑤</sup> (四一七三—4 (6)) 一通

○鎌倉初期写、玄澄筆力、折紙、「高山寺」朱印、無点

5、古包紙(表書)「風転法輪口伝」「表白等」「弁暉伝受記在之」

(四一五三—364) 一紙

○鎌倉初期写

6、始仏表白 (四一五三—432) 一通

○鎌倉初期写、折紙、「方便智院」朱印、墨点(仮名、返点、

鎌倉初期)、紙背消息アリ、

7、明恵求聞持表白案<sup>⑤</sup> (四一五七—27 (5)) 一通

○鎌倉初期写、定真筆、豎紙、「方便智院」朱印

8、星供表白<sup>⑤</sup> (四一七三—3 (1)) 一通

○鎌倉初期写、切紙、「方便智院」朱印、片仮名交り文ヲ含ム

9、鎮壇表白<sup>⑤</sup> (四一八七—73) 一帖

○鎌倉初期写、綴葉装、墨点(仮名、鎌倉初期)

10、(小嶋流阿弥陀秘口伝等)「表白」奥書 交了 (四一〇〇—

1—3) 一卷

○鎌倉初期写、卷子本、片仮名交り文ヲ含ム、墨点(仮名、

鎌倉初期)、紙継目紙背ニ花押アリ、

11、北斗供表白<sup>⑤</sup> (四一〇五—7) 一通

○鎌倉初期写、切紙、「方便智院」朱印、墨点(仮名、鎌倉初期)

12、不動略鎮表白<sup>⑤</sup> (四一二四—9 (9)) 一通

○鎌倉初期写、折紙、「方便智院」朱印、朱点(返点、句切、

鎌倉初期)、墨点(仮名、鎌倉初期)

〔鎌倉時代中期〕

13、(表白集) (二—75) 一卷

○鎌倉中期写、卷子本、「方便智院」朱印、卷首目錄別紙(本

文ト別筆ニシテ定真筆力)、片仮名交り文ヲ含ム、朱句切点

(〇八十三篇ノ表白、教誡等ノ輯録ニシテ、中ニ論語及西

域記(共ニ墨点アリ)ノ引用アリ、全文写真・翻写・索引

ヲ「高山寺資料叢書第二冊」ニ収ム)

14、始仏表白 (四一二四—11 (7)) 一通

○鎌倉中期写、折紙、「方便智院」朱印、墨点(返点、仮名、

鎌倉中期)

15、護摩表白<sup>⑤</sup> (四一五四—51) 一卷

○鎌倉中期写、卷子本、尾欠、「高山寺」朱印、墨点(仮名、

鎌倉中期)

16、十八道表白<sup>⑤</sup> (四一五七—29 (1)) 一通

○鎌倉中期写、折紙、墨点(仮名、鎌倉中期)

17、鎮壇表白 (四一二三—44 (1)) 一通

○鎌倉中期写、「方便智院」朱印、墨点(仮名、鎌倉中期)

18、鎮壇表白 (四一一三—44 (2)) 一通

○鎌倉中期写、「方便智院」朱印、墨点(仮名、鎌倉中期)

19、(表白) (四一一六—1—3) 一葉

○鎌倉時代嘉祿二年写、卷子本断簡、無点

20、初夜表白<sup>⑤</sup> (四一七三—4 (10)) 一通

○鎌倉中期写、折紙、「高山寺」朱印、朱点(仮名、句切、鎌

倉中期)

21、表白四種梅尾 (四一一三一84) 一冊

○鎌倉時代宝治二年写、仁真筆、袋綴装、「方便智院」朱印、

朱点(朱引、句切点)、墨点(仮名、宝治二年)

22、建長元年五月十二日於善妙寺松原殿御房行略鎮法之時表白⑤

(四一九七—82) 一通

○鎌倉中期写、折紙、「方便智院」朱印、墨点(仮名、鎌倉中期)

23、表白 (四一五三一491) 一通

○鎌倉中期写、折紙、片仮名交リ文ヲ含ム、譜点アリ

24、表白 (四一一二四—26〔5〕) 一通

○鎌倉中期写、折紙、無点

25、表白⑤ (四一一五六—10〔29〕) 一通

○鎌倉中期写、断簡、墨点(仮名、返点、鎌倉中期)

26、往生講表白 (四一一七二—4〔43〕) 一通

○鎌倉中期写、切紙、無点

⑤—1、表白事 (四一一五四—48) 一卷

○鎌倉中期写、卷子本、尾欠、「高山寺」朱印、無点

⑤—2、(表白目錄) (四一一〇二—1〔20〕) 一葉

○鎌倉中期写、静海筆、折紙断簡、無点

(鎌倉時代後期)

27、星供表白(端裏外題) ⑤ (二—332) 一卷

○鎌倉時代元応二年写、仁辨筆、卷子本(小本)、墨点(仮名、

声点、返点、元応二年)、表紙新補

28、表白 (四一五三一358) 一通

○鎌倉後期写、折紙、「方便智院」朱印、無点

29、薬師表白 (四一五三一456) 一通

○鎌倉後期写、折紙、片仮名交リ文ヲ含ム、無点

30、光明真言護摩表白(四一八八—36) 一帖

○鎌倉後期写、折本装栴型、尾欠、「高山寺」朱印、無点

31、北斗供表白 (四一九七—33) 一通

○鎌倉後期写、切紙、「方便智院」朱印、墨点(仮名、鎌倉後期)

32、祖師等御願供表白 (四一一二—90) 一帖

○鎌倉後期写、折本装、尾欠、「方便智院」朱印、無点、原表紙、

33、(表白) (四一一二四—17) 一通

○鎌倉後期写、折紙、紙背文書(嘉暦三年十二月五日頭助諷

誦ノ事)アリ、無点

34、大威徳表白并開題作法⑤ (四一一五六—2〔10〕) 一葉

○鎌倉後期写、仁辨筆、折紙、仮名交リ文ヲ含ム

35、表白⑤ (四一一五六—6〔70〕) 断簡一葉

○鎌倉後期写、折本装栴型、首尾欠、墨節博士(鎌倉後期)

36、略鎮法表白(四一一五七—29〔29〕) 一通

○鎌倉後期写、仁助筆、折紙、墨点(仮名、鎌倉後期)

37、(表白) (四一一七二—2〔59〕) 一通

○鎌倉後期写、折紙、無点

38、北斗供表白 (四一一七二—7〔14〕) 一通

○鎌倉後期写、続紙、天地墨界、墨点(仮名、声点、鎌倉後期)

39、(表白草) (四一一七五—24) 一通

○鎌倉後期写、切紙、無点

40、表白 (四一八〇—108) 一通

○鎌倉末期写、折紙、墨点(仮名、鎌倉末期)

41、表白 (四一三九一34) 一冊

○鎌倉末期写、袋綴裝横長本、「方便智院」朱印、墨点(假名、返点、鎌倉末期)

〔南北朝時代〕

42、年始不断供養表白神分折額 一帖

○南北朝時代写、折本裝、尾欠、「高山寺」朱印、墨点(假名、南北朝時代)

南北朝時代、原表紙

43、水天供表白 (四一二四一15) (5) 一通

○南北朝時代写、切紙、「高山寺」朱印、墨点(假名、南北朝時代)

時代)

44、水天供表白 (四一二四一15) (7) 一通

○南北朝時代写、切紙、「高山寺」朱印、墨点(假名、南北朝時代)

時代)

45、表白神分等 (四一五六一3) (9) 一通

○南北朝時代貞和三年写、折紙、墨点(假名、貞和三年)

46、表白 (四一五六一13) (5) 一通

○南北朝時代貞和五年写、仁耀筆、折紙、墨点(假名、貞治五年)

五年)

47、十八道表白 (四一五七一29) (2) 一通

○南北朝時代写、折紙、「方便智院」朱印、墨点(假名、南北朝時代)

朝時代)

48、表白神分等釈迦 (四一七三三14) (11) 一通

○南北朝時代写、然辨筆、折紙、墨点(假名、声点、返点、南北朝時代)

南北朝時代)

49、表白 (四一八七一86) 一葉

○南北朝時代写、折本裝柵型断簡、卷尾ノミ、墨点(假名、南北朝時代)、朱句切

50、千手表白 (四一九七一8) 一帖

○南北朝時代写、折本裝柵型、朱点(句切、科段、合符、返点、南北朝時代)、墨点(假名、南北朝時代)

〔室町時代初期〕

51、表白神分野 (四一七七一4) (8) 一帖

○室町初期写、折本裝、墨点(假名、返点、室町初期)

52、表白 (四一八七一67) 一通

○室町初期写、折紙、墨点(假名、室町初期)

53、表白通用 (四一五七一28) (3) 一通

○室町初期写、折紙、墨点(假名、室町初期)

〔室町時代中期〕

54、当用十八道表白并神分 (四一七八一33) 一帖

○室町中期写、折本裝柵型、朱点(句切、室町中期)、墨点(假名、室町中期)

55、護摩諸行表白 (四一七九一50) 一通

○室町中期写、折紙、墨点(假名、声点、室町中期)

56、表白 (四一八三一69) 一冊

○室町中期写、袋綴裝(小本)、墨点(假名、声点、室町中期)

〔室町時代後期〕

57、保元二年治眼表白(新外題) (二一148) 一卷

○室町時代享祿四年写、卷子本、首欠、墨点(假名、返点、享祿四年)、表紙新補

享祿四年)、表紙新補

58、開精作法 加行表白伝流 (四一九一12) (11) 一帖

○室町時代永祿六年写、折本装柀型、墨点(仮名、室町時代末期)

59、表白断簡(四一五三一604) 一葉

○室町末期写、切紙、断簡一紙、墨点(仮名、室町末期)、朱節博士

60、仁王経表白(四一九七—10) 一帖

○室町末期写、折本装、尾欠、朱点(仮名、返点、室町末期)、墨点(仮名、声点、室町末期)

61、(表白)(四一九七—87) 一帖

○室町末期写、折本装柀型、尾欠、片仮名交り文ヲ含ム、朱点(句切、室町末期)、墨点(仮名、節博士、室町末期)、角筆文字アリ

(注)⑤は、参考文献「表白に関する作法書等」を示す。

⑤は、その文献が、「高山寺古典籍纂集」(高山寺資料叢書第十七冊、東大出版会、昭63・2)に翻刻されていることを示す。尚、これについては、金水敏・古田啓両氏の詳しい解題があるのであわせて参照いただきたい。

先に、高山寺経蔵の表白文は、種々の形態で収蔵されていることを述べた。今、ここに列挙した、平安時代から室町時代までの諸篇を、その装幀に注目して整理すると(表①)の如くなる。

この表から知られる限りでは、鎌倉時代にあつては、折紙のものが多く伝存されているように見受けられる<sup>(5)</sup>。

この折紙は、法会の際にのぞむ導師が表白を持参する際に多用する形態であつたようである。

『沙石集』にも、

○鎌倉ニ或尼公、逆修シケリ。説経ナムドモセヌ僧ナレドモ、モシ希望ノ心モアリ、色代ニ請用セヨトテ、「一座ノ供養シ給ナンヤ」ト、イハセケレバ、布施ノホシサニヤ、無ニ左右領状シテケリ。思ハズニゾ檀那思ヒケル。サテ既ニ禮盤ニ登リテ、法用過テ、金打チ表白スベキニ、懐ヲサグルニ折紙ナシ。髓ニ懐中シツル物ヲト思ヒテ、サグレドモく大方ナカリケレバ、(以下略)

※傍線、筆者私ニ附ヌ(巻第六(二三)説法セズシテ布施取タル事、大系本27頁)

とある。

かつて取上げた平安時代の表白文は、漢詩文集等の中に収められ伝わっているものが多かったのに対し、高山寺経蔵には、このように、当時の導師が持参して実際に法会場で宣読したとみられる表白文が多く伝存しているのである。

### 三、資料の選定と文体分析の方法

#### (1) 資料の選定

高山寺経蔵に伝存している鎌倉時代書写の表白文は、全部で三十九篇拾われた。しかし、全篇を調査し得たわけではなく、又、これらのすべてが文体分析にたえ得るものでもない。まず、「高山寺古典籍纂集」に翻刻されているものを中心に、次の諸条件をできるだけ満たすことを宗とし、資料の選定に当つた。

① 作成乃至書写の年代が明確であること。

② 書写者が明確であること。

③ 本文が欠けていないこと。

④ 文章様式が、その書写時期のものを示していること。

室町時代	南北朝時代	鎌倉時代			平安時代 (含院政期)	時代	形態
		後	中	初			
					2		綴葉装柎型
3	4	7	8	4			折紙
			(1)				(折紙断簡)
1	2	2	1	2			切紙
				1			豎紙
				1			包紙
				1			綴葉装
1		1	2(1)	1			卷子本
			1				(卷子本断簡)
1			1				袋綴装
		1					袋綴装横長本
2	1	1					折本装
2	1	2					折本装柎型
	1						(折本装柎型断簡)
		1					続紙
			1				断簡
10	9	15	14(2)	10	2		計

(注) 括弧内の数字は、参考文献の篇数、空欄は、該当例なきことを示す。

(2) 文体分析の方法

この④については、峰岸明「表白の文章様式について」(高山寺資料叢書別巻「高山寺典籍文書の研究」所収、昭55・東京大学出版会)の御論を参照させて頂いた。

ここに選定した資料は、次の諸篇である。

〔鎌倉初期〕 3・4・7・8・9・11・12 (七篇)

〔鎌倉中期〕 14・15\*・16・18・20・21・22・25\* (八篇)

〔鎌倉後期〕 27・34・35\* (三篇)

(注) \*印は、尾欠なるが故参考にとどむ

漢字を主表記とし、対句表現を用いるという表白文の表現的性格は、鎌倉時代に入っても、略々高山寺経蔵の諸篇に継承されていると見られる。そこで、前稿「高山寺本表白集」所収の表白の文体

〔鎌倉時代語研究〕第9輯、昭61・5)において採った文体分析の方法をここでも概ね用いることとする。この「高山寺本表白集」は、近時、築島裕「本邦古社寺に伝存する漢籍仏典と国語史学」(『中央大学国文』32、平1・3)に、

○多分勸修寺辺から、定真(一一九四—一二五〇)の手を経て高山寺に入った文献であり、鎌倉時代初期に、高山寺の僧侶の間で実用に供せられたものと考へられる。

と説かれており、本稿で対象とする諸篇との関連も注目されるのである。

但し、峰岸博士の先掲論文に説かれているように、鎌倉時代に入ると、表記法の面に種々の変化が起つてくる。鎌倉時代の表白文体を把握するためには、この表現的性格も看過することはできないと思われる。

以下、この点を念頭に置きながら、考察をすすめてゆくこととする。

#### 四、高山寺経蔵に伝存する鎌倉時代書写の表白文の文体

(1) 表白文一篇当りの言語量及び対句部分と非対句部分の比率

今回調査し得た、高山寺経蔵に伝存する鎌倉時代書写の表白文十篇の、一篇当りの本文の文字数は、平均二四一字である。中には、九〇〇字近い(9) 鎮壇表白一八九二字、のような長大なものもあれば、わずかに一〇〇字足らずの(16) 十八道表白一九八字、などもあつて、その長短はさまざまである。

対句をなさない非対句部分は、一篇当り平均一一一字であるから、全体の四六・一パーセントであり、従つて、一篇中の五割強が対句表現を用いて文章を構成していることになる。

しかしながら、前稿で対象とした『高山寺本表白集』所収の表白文の場合、非対句部分の割合は、一九・二パーセントにすぎず、今回得た数値よりかなり下回るのである。

その理由として、ここでは、次の二点を指摘してみたい。

まず第一に、これらの諸篇では冒頭に仏・菩薩の名号等を列挙す

る、所謂(勸請句)(叡山文庫蔵『澄意作文大体』<sup>6</sup>)の置かれるものが多く、この部分は、

○敬真言教主大日如来金剛界会三十七尊大会曼荼羅諸尊聖衆并大悲

胎藏八葉蓮臺十大大会慶利聖衆惣<sup>シテ</sup>ハ仏眼所照恒沙塵数一切三宝

境界<sup>コトニ</sup>驚而言<sup>レ</sup> 夫以<sup>レ</sup>…(3、護摩表白<sup>初行</sup>)、敬<sup>レ</sup>言<sup>レ</sup>まで(傍

線、私に付す)が、勸請句)

の如く、対句を成さないので、非対句部分の割合が増したものと考へられるのである。

前稿に於いて指摘したように、『高山寺本表白集』所収の表白文中、非対句部分の割合の高かつた(78)・(79)・(82)の諸篇は、この勸請句を冒頭に配するものであつた。

第二の点は、(対句表現の崩壊現象)とでも言うべきことに因るものと考へられる場合である。例えば、

○乘水牛相者・是遊一行苦海中一自在教化衆生・義也。以<sup>a</sup>體爲<sup>b</sup>璽<sup>c</sup>珞<sup>d</sup>

者、乃消<sup>a</sup>伏鬼魅魍魎、除<sup>b</sup>厭媚<sup>c</sup>咒<sup>d</sup>咀<sup>e</sup>之<sup>f</sup>意也。六頭六面者・是<sup>g</sup>轉<sup>h</sup>

捨六弊<sup>i</sup>滿足六度<sup>j</sup>・義也。六臂六足者・即<sup>k</sup>淨六趣<sup>l</sup>・滿六通<sup>m</sup>・之<sup>n</sup>意也、

(15、大威徳表白)

など、句脚の「義也」「意也」に注目すれば、一見 a・c、b・d が対を成す隔句対の如くに思われるが、句の字数がそろわず、意味的対応も十全ではないので、これを対句表現とは認め得ないのである。かかる対句くずれの文章を含む篇が存することも、非対句部分増加のもう一つの原因となつていようと思へるのである。

但し、かような(対句表現の崩壊現象)は、総じて劣勢であり、先の(15)大威徳表白や(9)鎮壇表白などの一、二の篇に顕著に認められる程度である。

○又八幅銀輪八方ニ囲邊シ、八方飛行シテ此伽藍中ニ壞スル正法ヲ惡<sup>(悪)</sup>毗那夜迦惡龍惡鬼神等皆悉可令遠離退散、(9、鎮壇表白)  
 従つて、時代が下るにつれて、この現象が強まるなどといった傾向性も看取されず、鎌倉時代後期書写の(27)星供表白なども、非対句部分は一四・一パーセントにとどまるのである。

△表②▽

倉 中 期						鎌 倉 初 期						表 白 番 号	句 種	
21 a	20	18	16	15	14	12	11	9	8	7	4			3
													壯句	單
		1	1	1		1	2		1		1		緊句	句
6	1	1	1	4	2	3	4	6		5	10	2	長句	對
							1	1	1				輕隔句	隔
							1						重隔句	
													疎隔句	
2	1	2	1			1	3		4		2		密隔句	
1							1		1				平隔句	對
	2	1									1	1	雜隔句	
											1	1	その他	

(2) 対句部分の文体的特徴  
 一、句格法  
 観智院本「作文大脉」の「筆大脉」の基準に従つて対句を分類し、集計したものが(表②)である。



%	合計	鎌倉期				
		34	27	25	22	21 <sub>b</sub>
2.5	2		2			
13.8	11					2
83.8	67	6	6		6	4
12.2	5			1		
2.4	1					
2.4	1					1
48.8	20		1	1	2	
7.3	3					
19.5	8					
7.3	3	1				

(注) ・21表白四種、a 伝法灌頂表白・b 求聞持表白を示す。  
 ・35は、勸請句のみであるので、ここには掲げない。

これによれば、まず、二つの句から成る単句対で、長句の占める割合が高く(八三・八パーセント)優勢であることが知られる。

長句は、五字以上十余字から成る二句の対であって、

○已<sup>ニ</sup>学<sup>ヒ</sup>一部<sup>ノ</sup>大法<sup>ヲ</sup> (剩<sup>リ</sup>伝<sup>フ</sup>三密<sup>ノ</sup>護摩<sup>ヲ</sup>) (3、護摩表白<sup>初行</sup>)

○扱<sup>テ</sup>吉日<sup>良辰</sup>而披<sup>キ</sup>金剛<sup>ノ</sup>壇場<sup>ヲ</sup> 儲<sup>テ</sup>微妙<sup>ノ</sup>札<sup>ヲ</sup>奠<sup>テ</sup>而供<sup>テ</sup>堅牢<sup>ノ</sup>地神<sup>ニ</sup>

(18、鎮壇表白)

○早持<sup>テ</sup>西母<sup>長生</sup>之<sup>還</sup>算<sup>ヲ</sup> 速誇<sup>ラム</sup>東父<sup>万花</sup>之<sup>榮</sup>楽<sup>ニ</sup> (27、星供表

白)

の如きものである。緊句は之れに次ぎ(二三・八パーセント)、杜句は極めて劣勢(二・五パーセント)である。

次に、第一句と第三句(上句)、第二句と第四句(下句)というように、句を隔てて対句を構成する隔句対では、

○現<sup>シ</sup>テ十九<sup>幕</sup>惡<sup>ノ</sup>相<sup>白</sup>ヲ 降<sup>リ</sup>伏<sup>シ</sup>四魔<sup>ノ</sup>惡<sup>ノ</sup>軍<sup>ヲ</sup> 蒙<sup>テ</sup>三世<sup>如來</sup>ノ<sup>教</sup>

勅<sup>ヲ</sup> 利<sup>ト</sup>益<sup>シ</sup>五濁<sup>ノ</sup>衆生<sup>ヲ</sup> (給<sup>フ</sup>) (22、建長元年五月十二日於善

妙寺松原殿御房行略鎮法之時表白)

○莊<sup>ニ</sup>札<sup>奠</sup>之<sup>密</sup>壇<sup>ヲ</sup> 祈<sup>テ</sup>壽<sup>福</sup>ヲ 於<sup>テ</sup>当年<sup>屬</sup>星<sup>ニ</sup> 調<sup>分</sup>之<sup>供</sup>具<sup>ヲ</sup> 弘<sup>ハム</sup>

災厄<sup>於</sup>七万里<sup>ノ</sup>外<sup>ニ</sup> (27、星供表白)

の如き、上句五字以上、下句六字以上の密隔句の割合が高い(四八・八パーセント)ことが知られる。以下、雜隔句(一九・五パーセント)、輕隔句(二・二パーセント)と続く。

表白文に於いて長句や密隔句が優勢となるのは、概ね平安時代後期以降と見られる。

院政期の終わり頃には、一句を二十字近くも費して作られる長句の例や、上下句とも十字を超える密隔句の例が指摘されたが、此度調査した、高山寺経藏に伝存する鎌倉時代の表白文には、かような長文の句の例は拾い得ないようである。



由の一つとして、勸請句「敬白…而言」を冒頭に置く形式の一般化ということが関係しているであろうことを指摘しておいた。

この「敬白…而言」を冒頭に置く書式は、鎌倉時代に入って漸次定型化して来るものであると、峰岸博士は説かれる。今回の調査では、この書式の定型化した結果、

○敬真言教主大日如來、夫<sup>レ</sup>折<sup>テ</sup>曜宿相應<sup>ヲ</sup>（12、不動略鎮表白）

○敬真言教主大日如來、夫<sup>レ</sup>折<sup>テ</sup>曜宿相應<sup>ヲ</sup>（22、建長元年五月十二日於善妙寺松原殿御房行略鎮法之時表白）

の如き、途中から省記したケースも認められた。

「敬白」が文章末尾に置かれるのも鎌倉時代の表白文の特徴である。

さて、観智院本「作文大躰」の「筆大躰」は、対偶をなさず独立的に用いられるものを、文章の発端に用いる「発句」、四字以上で、用字の声調も自由な「漫句」、文末に置いて語気を強調する助辞である「送句」、前後二つの文を接続する機能等を有すると考えられる「傍字」の四種類に分類する。

発句では、「夫以」・「夫」・「方今」・「爰」が時代を通じてよく使用され、傍字では、接続詞として、「然則」・「所以」・「而」・「然而」・「是以」・「抑」・「依之」・「是故」・「於是」・「以之」などが、副詞として、「仰願」・「就中」・「何況」・「今」・「方」・「凡」・「只」などが使用される。

送句では、「也」をはじめとして、「者也」・「矣」・「哉」・「以来」や敬語の補助動詞「給」などが拾われる。

これらの字句は、ほぼ前代の表白文によく使用されていたものと一致し、これをそのまま踏襲したと見て大過ないと判ぜられる。特

に、「給」・「依之」の使用より院政期の表白資料群との共通性が顕著であるように見受けられる<sup>10</sup>。

以上のことから、(2)対句部分（句格法・平仄法）について見たのと同様、非対句部分の、発句・傍字等の独立句に於いても、前代の様式に倣うところ大であることが知られ、鎌倉時代に入って新たに変遷を遂げたとすべきものは見出し難いのである。

## 五、結論——表記との関わりから——

高山寺経藏の鎌倉時代に宣読されたとみられる表白文は、「朗誦の容易化」という事情のもとに、表記形態の面では、平安時代とは異なった、新たな変化を遂げたものと見られる。峰岸博士の説かれる如く、(一)漢文本文への加點、(二)片仮名交り文化、(三)段落毎の改行・字下げ等の記載形式の多様化、がそれである。

かように、高山寺経藏に収蔵せられた表白文の文体は、表記上、鎌倉時代に入って新たな変遷を遂げたとみられるのであるが、依然、本文の基調を成している対句部分に於いては、平安末期の「高山寺本表白集」所収の表白文等にみられた句格法をそのまま継承しているとみられるふしがあり、また、非対句部分に於いても、発句以下の独立句は、ほぼ前代のものを受け継ぎ、新たに用いられ始めたのみるべきものは見出し難いのである。

このことから、平安時代の文人達の駢儷文創作に対する腐心や努力は、鎌倉時代の高山寺経藏の表白文の担い手達には、積極的に受容されなかつたと結論づけられそうに思われる。

かかる結論を下すには、尚、文章中に使用される一つ一つの語について前代の文章中のそれとの比較を行うことが必要となろう。こ

れについては、別に稿を改めて論ずることとしたい。しかし、この見通しの傍証としては、次の二事項を挙げることができる。

鎌倉時代に、

(一)「高山寺本表白集」の如き、前代の表白文を集成した「表白集」が書写されていること。

(二)既成の表白文を襲用する事態が生じていること。<sup>(1)</sup>

今後は、さらに調査をすすめて、鎌倉時代の表白文全般について論及してゆきたいと考えている。

注

(1) 築島裕「高山寺本表白集の研究」(高山寺資料叢書第二冊、高山寺本古往来 表白集)所収、昭52・東京大学出版会)

峰岸明「表白の文章様式について」(高山寺資料叢書別巻、高山寺典籍文書の研究)所収、昭55・東京大学出版会)

(2) 拙稿①「高山寺本表白集」所収の表白の文体」(鎌倉時代語研究 9、昭61・5)

②「京都女子大学蔵表白集解説並びに影印」(鎌倉時代語研究 10、昭62・5)

③「平安時代の表白文に於ける対句表現の句法の変遷について」(国語学 149、昭62・6)

④「平安時代における表白文の文体的性格と和化漢文的要素に注目して」(国文学攷 115、昭62・9)

⑤「漢字の用法から見た平安時代の表白文の文体」(国文学攷 118、昭63・6)

(3) 昭和六十年七月十二・十三日調査。

(4)「高山寺古典籍纂集」(高山寺資料叢書第十七冊、昭63・東京大学出版会)

(5)かかる寺院の書物の形態的特徴については、次に言及がある。

中野達慧「興教大師御撰述に対する書史学的研究」正・続(「密教研究」33・34)

牧野和夫「鎌倉初・前期成立十二卷本『表白集』伝本の基礎的調査とその周辺(1)・「類聚」ということ」附、知見新出安居院系唱導書類の紹介並びに補記数條(「実践国文学」35、平元・3)

(6)「表白十四段句、一勸請句」の項(昭和六十一年八月十九・二十日、原本実見)。

(7)注(2)③文献。

(8)注(2)③文献。

(9)群書類従本「作文大體」・「王沢不渴鈔」・「文筆問答鈔」↑注(2)①文献三八頁参照。尚、犬井善壽氏は、「平治保元平家

之物語」普通唱導集」所載一句の吟味」(筑波大学平家部会論集 1、平成元・3)の中で、かかる隔句対の平仄に

関する規則を唐詩の今体詩にもとめておられるが、何故これが基準たり得るかについての十分な説明がなされておらず疑問である。

(10)注(2)①・④文献。

(11)注(1)峰岸文献。

▼引用文等につき、印刷の便を考えて表記を改めた箇所がある。(附記)

本稿は、昭和六十年年度提出の修士論文の一部を改稿したものであ

る。本稿を成すに当り終始御指導を賜わった小林芳規先生に、又、資料調査の際に御高配賜わった、高山寺御当局の皆様並びに高山寺典籍文書総合調査団の諸先生に厚く御礼申し上げます。

尚、本稿は、平成元年度文部省科学研究費（総合研究A 課題「平安鎌倉時代語研究資料の総合的調査研究」、奨励研究A 課題「平安鎌倉時代に於ける表白・願文の文体の研究」）による成果の一部である。

—— 広島大学文学部助手 ——